ゼカリヤ11：1～17の預言　二人の羊飼い

預言者ゼカリヤ：バビロン捕囚から帰還した時期の預言者、レビ族の祭司
預言の時期：（ペルシヤの）ダリヨス王の第四年＝BC519年（ゼカリヤ7：1）

1. ゼカリヤ11：1～17のアウトライン＝3つの区分
   (1) 1～3節　国土の荒廃に関する預言
      ① イスラエル全土が北から南まで荒廃するという預言
      ② 紀元70年と135年の2度にわたるローマとの戦役で現実になる。
      ③ 3節　複数形で「牧者たち（羊飼いたち）」＝イスラエルの指導者たち
      ④ 3節「彼らのみごとな木々」＝神殿
   (2) 4～14節　真の羊飼いが拒否されることの預言
      ① メシアの初臨に関係する預言。メシアは「真の羊飼い」として描かれる。
      ② イスラエルの指導者たちが「真の羊飼い」を拒否する。このことが、第1次戦役でのエルサレム陥落（紀元70年）へとつながる。
      ③ 4節　ほふるための羊の群れ＝イスラエルの民
      ④ 5節　これを買った者＝そのときの支配者であるローマ帝国
      ⑤ 7節　羊の商人たち→直訳すると「羊の悩むものたちのために」となる。「悩む」は、「貧しい」とか「あわれな」という意味でもある。
      ⑥ 預言者が使う慣用句がある。「悩む者たち」、「貧しい者たち」、「苦しめられている者たち」、「助けを必要とする者たち」といったことば。それらは、イスラエルの中の少数の真の信仰者＝レムナントを指す。
      ⑦ 10節　慈愛の杖が折られた＝神の守りが取り去られた
      ⑧ 11節　その日、レムナントは主のことばを悟る→エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら山へ逃げよという主イエス（ルカ21：20）の命令に従う。
   (3) 15～17節　偽の羊飼いが現れることの預言
      ① 神が、「愚かな牧者」（15節）、「能なしの牧者」（17節）をこの地に起こす
      ② 彼は偽の羊飼い、偽のメシアである。
      ③ 第2次戦役は、ユダヤ側ではメシア運動に発展。反乱軍の指導者バル・コクバを、ユダヤ教指導者がメシアと認定した。
      ④ このことが、紀元135年の国土喪失・世界離散へとつながる
   (4) 前回は、第二番目の区分の途中まで、11節までを扱った。今回は、第二区分の残りの部分（12～14節）と、第三区分とを扱う。
      ① 良い羊飼いの値打ち（11：12～14）
      ② 愚かな羊飼い（11：15～17）
      ③ まとめ

2. 良い羊飼いの値打ち（11：12～14）・・・彼の仕事に対してつけられた価値
   (1) 12節　良い羊飼いはイスラエルの指導者たちに彼の仕事を評価するように求める。
      ① 銀貨30枚を支払われる。

② 出エジプト 21：32　死んだ奴隷の値段　→　侮辱的な価値

(2) 13節　この預言の中で、最も重要な内容が語られる。

① 「わたし」が評価された＝良い羊飼いは、神ヤハウェである。

② ゼカリヤは預言的な役を演じていたことが明らかとなる。実際に演じるというのは、旧約預言のパターンのひとつ。

③ 良い羊飼いの役割は、ヤハウェご自身によって成就されるときが来る＝神ご自身が人となり、良い羊飼いとして人々の前に現れる。

(3) 13節　命令「神殿域の中にあった陶器師の区画に銀貨30枚を投げ入れよ」

(4) 預言の成就＝マタイ 26：14～16、27：3～10

① イスカリオテ・ユダは、イエスを裏切る見返りに、銀貨30枚を支払われた。

② 祭司長たちは、その銀貨を神殿の金庫の中から支出した。

③ その資金は本来、神殿で捧げる犠牲の動物を購入するためのもの。

④ 祭司長たちは、意図せずして、真の犠牲に対して支出したことになった（ヨハネ 1：29、ヘブル 9：11～12、10：4～18）

(5) 14節　13節で受けた侮辱に対する応答

① 二番目の杖「結合」を折る。これも預言的行為で、羊の群れが散らされ、イスラエルの民族的な結合が失われることを示す

② 紀元66年～70年に起きたこと：ローマに対する第1次戦役において、反乱軍の中核となった熱心党の中に、多くの派閥ができて、内紛が生じた。ローマ軍の包囲を受ける中で、備蓄食料の分配をめぐって対立し、互いに殺し合うまでになる。結局、エルサレム市内は内戦状態となり、ローマ軍の総攻撃の前にあっけなく陥落することになった。

③ 結合の杖が折られたことで羊の群れが散らされたように、ユダヤ人の世界離散は紀元70年に始まった。

3. 愚かな羊飼い（11：15～17）

(1) ゼカリヤの預言 11：4～14を一言でいうと、イスラエルの指導者たちが良き羊飼いを拒否するということ。それに続く15～17節の預言は、イスラエルの指導者たちが、良き羊飼いを拒否しておきながら、そのあとで、愚かな、不義の羊飼いを受け入れるということである。

(2) 15節　ゼカリヤは、良い羊飼いの役割を終えて、今度は、愚かな羊飼いを演じるように命じられる。

① 愚かな羊飼いは、羊の群れに害しかもたらさない。

② 紀元132年、ユダヤ人はローマに反抗して、第2次戦役を起こす。そのときの指導者は、シモン・バル・コクバ（星の子シモン）。

③ 数多くのラビが支持した。とくに、戦役の半ばでは、首席ラビのラビ・アキバが、バル・コクバをメシアであると宣言した。

④ 戦役の当初は、イエスをメシアとして信じるユダヤ人信者たちも参戦していたが、このメシア宣言により、彼らは戦線から離れざるを得なくなった。

⑤ ラビ・アキバは、各地にあったユダヤ人評議会を抱き込んで、ユダヤ国内においてはイエスをメシアとして信じるユダヤ人信者たちとはいかなる関係も持ってはならないとする長文の法律を公布した。

(3) 戦役の展開

① 当初は、ユダヤ軍が優勢に戦いを進める。

② 態勢を整えなおしたローマ軍は、イスラエル全土の焦土作戦をとる。

③ 追い詰められたバル・コクバが最後の抵抗をしたのは紀元 135 年、そのときには全土が文字通り焼き尽くされて、小麦や大麦はおろか、野の草ひとつも生えない荒廃地となり、人々は飢えに苦しんでいた。

④ このようにして、ゼカリヤ 11：1～3 の荒廃の預言は、紀元 70 年の時以上のスケールで成就した。

4. まとめ

(1) 初臨のメシアは拒否される。特にユダヤ人指導者から拒絶される。

(2) イスラエル全体としてはメシアを受け入れないが、そこには少数の信仰者「レムナント（イスラエルの残れる者）」がいて、この人々はメシアを受け入れる。

(3) イスラエルの指導者は、メシアを銀貨 30 枚で売買する。

(4) メシアの拒否は 2 つの結果を生んだ。

① イスラエルから神の守りは取り去られ、異邦人の攻撃にさらされることになった（紀元 70 年）。

② 民族の一致が取り去られ、イスラエルは離散の民となった。

(5) 本物のメシアに背を向けたために、イスラエルは愚かにも偽のメシアを受け入れてしまう。これによって、紀元 135 年に第二の破滅を迎えることになる。

(6) ゼカリヤ 11：1～3 に記されている荒廃が紀元 70 年に成就したとすると、メシアは紀元 70 年より前に来ているはずである。

(7) メシアは良い牧者である（ヨハネ 10：11～18）

5. イスカリオテ・ユダの死（マタイ 27：3～10、使徒 1：18～19）とエレミヤの預言

(1) 信じていなかった（ヨハネ 6：64）

(2) 後悔した（マタイ 27：3）

① 救いに至る悔い改め　ギメタノイア

② マタイ 27：3 では、ギメタメロマイ

(3) 返して（マタイ 27：3）

① ユダは、銀貨 30 枚を返そうとした。

② 祭司長たちは、その受け取りを拒否した（27：4）。

③ ユダは銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った（27：5）

(4) 首をつった（マタイ 27：5）

① ユダの自殺は、過越の祭（それに続く種なしパンの祭）の初日の明け方。

② その直後の朝 9 時には、祭司のみがあずかる過越の羊の犠牲が神殿でささげ

られる。

③ ユダヤの法では、そのときにエルサレムの市内に死体があると、汚れのために犠牲をささげてはいけない。その場合、遺体をとって城壁から下のヒノムの谷に投げ入れれば、汚れを免れることができる。犠牲をささげてから、投下された遺体はあらためて埋葬される。

(5) 首をつって自殺したイスカリオテ・ユダの遺体は、おろされて直ちに城壁から下のヒノムの谷に投げられた（使徒1：18）

(6) 血の代価だから（マタイ27：6）

① ユダヤの法では、不正に得た金銭は、神殿の金庫に入れることはできない。

② その場合は、持ち主に返すか、公共の目的のために使われる。

③ ユダは死んだので、祭司長たちは、公共の目的のために使うこととした。

④ 陶器師の畑を買って、旅人たちの墓地とした（27：7）

⑤ この畑は、ヒノムの谷にあった。そこに最初に葬られたのは、ユダであった。

⑥ ユダヤの法では、土地の購入名義は、この場合、死後であっても、ユダになる（使徒1：18「地所を手に入れた」）

(7) マタイは、ゼカリヤの預言を引用しながら、この事件はエレミヤの預言と関係していると記した（マタイ27：9～10）

① エレミヤ7：31～34

- ヒノムの谷で、幼児犠牲が行われていた（Ⅱ列21：4～6、23：10）
- この場所は「虐殺の谷」と呼ばれる。余地がないほどに人々が葬られる。

② エレミヤ19：1～15

- 長老と年長の祭司長たちといっしょに、「瀬戸のかけらの門」の入り口にあるヒノムの谷へ出かけて預言した。
- 見よ、その日が来る。その日には、この所は「虐殺の谷」と呼ばれる。
- ユダとエルサレムのはかりごとをこぼち、彼らを敵の前で、剣で殺し、・・・そのしかばねを、空の鳥や地の獣にえじきとして与える。
- 包囲と窮乏のために、・・・彼らは互いにその友の肉を食べ合う。

(8) マタイは、4つの福音書の中でも、とりわけ、ユダヤ人指導者たちによるメシア拒否（12章）を記録し、その後に繰り返し、「この世代」に対してイエスが裁きの宣言をしたことを記録した。マタイの執筆対象はユダヤ人、その執筆目的は、差し迫っているさばき（紀元70年）について警告することであった。

(9) 紀元70年、エルサレム陥落において、ローマ軍はユダヤ人を虐殺し、ヒノムの谷に死体を集めて葬ったが、預言のとおり、葬りきれないほどであった。

(10) イエスをメシアではないと拒否した祭司長たちは、エレミヤの呪いを買い取ったとのだという意味で、マタイはゼカリヤの預言を引用しつつ、エレミヤの預言のとおり、と記したのである（マタイ27：9～10）。